

プロジェクト型基礎研究のススメ —あるいは、二人のノーベル賞学者との出逢い—

岡田 漱平 理事

Sohei Okada



1983年10月1日、原子力留学生としてスイス・ジュネーブにあるCERN（欧州合同原子核研究機構）での生活の初日、私は構内にあるホワイエ（炊事設備の無いこじられた寮）の玄関にいた。そこには、東洋人の顔をしたおじさんがいた。ニーハオかコンニチワかボンジュールかと躊躇していると、先方から「おう、日本からか。小柴です。」と言うので、「はあ、岡田です。」と間抜けな答えをしてしまった。当時、畑違いの私は存じ上げていなかったが、小柴昌俊先生との出逢いであった。先生はすぐさま私をご自分の部屋に連れて行って下さり、どこそこのデパートにはインスタントラーメンなどの食材があり、こっちのデパートで投げ込みヒーターを買ってきて器にいっしょに放り込めば、おいしいラーメンができる、などと手ほどきして下さいました。その後先生とは末永く・・・となればカッコイイのだが、それっきり、ただし多くのお弟子さん達とはしょっちゅう呑んで、素粒子の話で盛り上がり、楽しい1年を過ごすことができた。お弟子さん達は先生を畏敬しつつも、自由にものが言える雰囲気があった。

その数年後、高崎研でビーム利用の国際会議にカルロ・ルビアを招聘することになった。ウィークボソンの発見でノーベル賞を「獲った」と言われた人（当時CERN所長）である。「岡田君はCERNにいたことがあるから最初から最後までアテンドしてよ」という無茶苦茶な理由で成田まで出迎えに行った。成田から高崎までの列車の中、彼は私を相手に、複数の重イオンビームを燃料ペレットにぶつけて核融合を起こすという新しいアイデアについて熱弁をふるった。「ペレットはどうやって浮かすんですか?」「泡!」「真空の中にアワですか?」「そういうことは気にせんでよろしい」というような会話が合った。私のような若造（当時はね）とも気軽に議論する人だった。彼は形式張った会食が嫌いで、結局私の行きつけの居酒屋で呑むことになったのだが、持参のパソコン電源の変換プラグが日本のコンセントに合わないから別の変換プラグを買ってきてくれ、と言う。そこで買ってはきたが、今度はパソコンのプラグと変換プラグが合わない。すると彼は、やおら持参の変換プラグと買って来たばかりの変換プラグを合体させて無理矢理コンセントに押し込んだ・・・ら、動いた。

ニュートリノとウィークボソンという二つのプロジェクト型純粋基礎研究をリードした二人のノーベル賞学者のエピソードを紹介した。そこで、多少無理矢理な気もするが、原子力機構の基礎研究である。私は、人材と施設から言って、機構はプロジェクト型（純粋）基礎研究ができる、日本でも数少ない研究所のひとつではないかと思う。物質でも生命でも、テーマを絞って謎解きに人を集めるのである。組織の壁はとっばらう。そのとき必要となるのは、ドンブリに水と乾麺と投げ込みヒーターを放り込んでラーメンをつくるという、柔らかな発想を持った強烈なリーダーと、自由にものが言える雰囲気だろう。